

# 『石清水物語』と夢

大園 岳雄

はじめに

『石清水物語』では、物語の展開上、重要と思われる場面に「夢」のモチーフが度々用いられている。以下、その場面を取り上げ、若干ではあるが考察を加えてみたい。

## 一 伊予守が石清水で神の託宣を受ける場面

ふかくのみたのみをかくるいはし  
水ながれあふ瀬のしるべともなれ  
いさゝか成紙に書て、御前の柱にし  
し付て、夜もすがらおこなひあかし  
て、暁ちかく成ほどにうちやすみて、

いさゝかまどろみたるゆめに、ほう  
でんのうちより、けだかき声にて、  
此歌をよみ給ふ。

「夢ばかり結びおきける契りゆへな  
がきおもひに身をやこがさん  
いのちはかぎりある物を」といふ  
と聞程に、明ぬとしらるゝ鐘の音に、  
ふとおどろきぬ。(九五〜九六頁)

東国での戦から帰還した伊予守が、姫  
君への思いを断ち切れず、石清水へ参籠  
する場面である。この場面で伊予守は和  
歌を読み、石清水八幡に姫君との逢瀬を  
祈願する。夜通し行い明かした甲斐があつ  
てか、伊予守は「夢」で石清水八幡からの  
託宣を受ける。この託宣は謎に満ちた和歌

によつてなされており、以下、物語が展開  
すること、この謎の種明かしがなされて  
いく。このような観点から捉えようとすると、  
この和歌は『石清水物語』の一つのテーマ  
(伊予守と姫君の悲恋の物語)を担う重要  
な和歌であり、この和歌が詠まれる場面が  
他ならぬ「夢」の中であることは注意すべ  
きであろう。

## 二 姫君の父関白が石清水八幡の 使いより託宣を受ける場面

九月も末に成ぬ。空暗て、ほしの  
光りもあきらか成夜、とのゝ御夢に、  
玉の冠してをきはいたる、かしら白き  
おきなの、ほこさきに墨筆結びつけて  
さゝげもち、たゞ入にいり来るを、あ  
やしと見るほどに、御ぜんのかたへあ  
ゆみよりて、此御れうにあまたしかけ  
たるきぬどもの中に、姫君の御まへの  
とおぼしくて、かさなりたるを引おと  
して、さか木につけたる筆して、袂に  
物を書付るをみれば、

「あだ人の重ねし夜半の衣手を雲井  
にいかゞおもひたつべき

なめげにやあらん」と、さだかにか  
きつけたるを、「是はたれ人におはす  
る」ととへば、「八まん大ぼさつの御  
つかひなり」とて、行過ぬるとおぼ  
すほどに、驚給ぬ。

(一一四—一一五頁)

姫君の入内が本格的に動き出した矢先、  
父関白は夢中にて「八幡大ぼさつの御つ  
かひ」と名乗るものから託宣を受ける。  
この託宣も(一一)の場面と同様に謎に満  
ちた和歌によつてなされている。物語の  
読者にとっては、この和歌の謎は、この  
場面に至るまでに明かされているので、  
伊予守と姫君の逢瀬を指すことは明白で  
あるが、知る由のない物語中の登場人物  
である父関白は、自身の息子、秋の大納  
言と姫君との関係を疑う。姫君の入内は  
取り止めとなり、以下、姫君の運命はさ  
らに錯綜することとなる。姫君の入内取  
り止めという、一つの大きな場面展開をも

たらす契機に、「夢」のモチーフは用いら  
れているのである。

三 伊予守が中務宮家にて苦しむ  
姫君について知る場面

こわたのさ<sup>※</sup>とよりは、心のおき所な  
きまゝに、日を経て、弁がもとへをと  
づれけれど、何のかひあるべき事とも  
みへず。あまりにおもひくづ折て、な  
き臥たる夢に、ありし御さまよりも、  
ことの外におもやせて、いみじく物お  
もひたるけしきにて、かたはらにおは  
しましけるをみつけこへて、「いかに  
してものせさせ給へるぞ」と、夢心地  
にも浅ましくめづらかなるに、「しいて  
うき世に」とばかりにて、袖をかはに  
おしあてゝなき給ふを見るに、我もな  
かれて、「などかくは」といはんとする  
程に、おどろきぬ。

(一二一—一二二頁)

姫君の行方が分らず、失意に沈む伊予守  
の「夢」に姫君は現れる。そこでみた姫君

の姿は、以前よりも痩せ細り、悩み苦しむ  
ものであった。この「夢」を契機に伊予守  
は姫君の行方を本格的に求め始める。結果、  
弁を通じて姫君が中務宮に嫁いだことを伊  
予守は知ることになる。今まで行方知らず  
の姫君を案じてばかりいた伊予守は、「夢」  
によつて実際の姫君の苦悩を知るのである。

四 考 察

以上、物語の展開を握る重要な場面の  
中で、「夢」のモチーフが用いられている  
場面を取り上げてみた。いずれも「夢」  
が契機となり、物語中の登場人物の運命  
が決定されていく。(一)では、伊予守と  
姫君の悲恋が暗示され、(二)では、姫君  
の入内は中止され、中務宮と婚姻するこ  
とによつてさらなる苦悩を背負うことに  
なり、(三)では、ようとして知れない姫  
君の行方を伊予守へ知らせることになる。

物語を展開させるにはそれなりの力が  
必要である。その力が働く場面に度々  
「夢」というモチーフが用いられるのは、

大変興味深い。西郷信綱氏が『古代人と夢』(平凡社 昭47)に述べるように、「夢は、昔の文学にはなくてはかなはぬ大事な構成要素の一つであった」のかもしれないが、物語を動かす基点の一つに「夢」を据えることは、『石清水物語』の特徴の一つとして挙げる事が出来るのではなからうか。

### おわりに

物語の展開に「夢」が関わる問題は、何も『石清水物語』だけのことではない。他の先行物語とも比較する必要があるだろう。また、石清水八幡宮と「夢」についての関わりも考察する必要性もある。問題は山積みだが、『石清水物語』に度々登場する「夢」というモチーフが、一つの神秘的な雰囲気醸し出すアクセントとして働いていることは間違いない。

◎『石清水物語』本文の引用は、『鎌倉時代物語集成 二』(笠間書院)による。ただし、『石清水物語』は引用本文の底本である射和文庫

本(第三系統)と他本(京都大学蔵本(第一系統)、神宮文庫蔵本(第二系統)、天理図書館蔵本(第四系統))を校合し、一部表記を改めた。

\*1 射和「なかく」——京大・神宮・天理「なかれ」

\*2 射和「しるし」——京大・神宮・天理「しる(一)」

\*3 射和「ことの」——京大・神宮「こわたの」、天理「こはたの」

\*4 射和「おもひりづ折て」——京大「おもひくつをれて」、神宮・天理「おもひくつおれて」

——おおぞの・たけお、広島大学大学院

博士課程前期在学——